

腐食センターニュース

腐食センター10周年を迎えて

(社) 腐食防食協会 腐食センター
センター長 岡田 秀 彌

腐食センター10周年を迎えて真に喜ばしい。よちよち歩きの時代からセンター内外にあって終始変わらぬ御支援を賜った多くの方々に感謝の意を表したい。内にあるは辻川先生をはじめとする頭脳集団がテーマの難易にかかわらず誠意をもって対処してくださった事、また松島先生は創立以来の同志として活動され、大局的見地から種々御発言戴いた事、事務局サイドとしてはセンター内のメンバーは勿論の事、協会サイドの方々からも多大な御援助を戴いた事は感謝に堪えない。あらためて御礼申し上げたい。

また、我々が企画した各地方での無料相談会開催にあたって心からの御支援を戴いた事、あらためて御礼申し上げたい。これによって、我々は腐食の実態について、勉強することが出来た事、各地方で実際に腐食問題に直面しているの方々に接触する事が出来、大いに資するところがあり、センターの充実に大いに寄与して頂いたことに対し、感謝している次第です。今後もよろしく願います。

ここで少しセンター設立の経緯等思いつくままに述べさせて戴き、将来どうするか議論の種にしていだければ幸いと思っています。私自身は腐食の現業を離れて久しい。従って多少の思い違いや間違いがあるかもしれない。御寛恕願いたい。

ご存知のように腐食センター構想は英米、なканずく英国における Hoar Report に記載された事から始まっている。まず、国における腐食損失の額を算出することから始まった。腐食損失とは防錆・防食にかかる費用の事で対象となる材料は主に金属で、中心は鉄鋼になる。この腐食損失費用は GNP の数パーセントになり、この費用を節約するには腐食センター機関の設置が提唱されている。この報告は英国では前出の Hoar Report、米国では異なる算出方法で Uhlig 教授がなされた。

Uhlig 方式の算出方法は多少多目に出るが、何れにしても GNP の数パーセントの範囲に納まっている。

米国ではこのセンターの具体的な形は見るに到らなかったが、英国ではマンチェスター大学でその設立が見られ、大学内で活動の後、会社設立にまでなつたと聞いている。

M.Pourbaix はベルギーで腐食センターの設立を具体化し、彼亡き後も、息子である A.Poubaix がその機関を継承していると聞く。

我が国で強くその設立を主張されたのは現在は亡き北海道大学名誉教授岡本剛博士で腐食防食協会設立後最初の協会の事業として、この腐食損失の算出、続いてセンターの設立を強く主張された。

話は前後するが、センターの設立より前に腐食損失の算出を行う委員会を協会内に設置し、Hoar 方式、Uhlig 方式の両面から算出を行った。この算出に当たっては日本防錆技術協会と共同で行う事になり大いにお世話になった。結論的にみると、GNP に対する腐食損失の値は英米とほとんど同じく数パーセントということになった。極最近日本では柴田先生を中心に産業構造の変化に伴う腐食損失の算出が行われたが、内容の変化はあったものの、腐食損失のパーセンテージは、概ね数パーセントに納まったと聞いている。

腐食損失額の計算で問題となるのは、事故により作業停止になったときの損失をいかに計算するかと言うことで、これは今もって正確な値は出されていないとか、近年になっての事故の大きさを考えると、最初に我々が算出した時代より遙かに大きな値になると考えられる。

こうした経過でセンターの設立と言うことになったが、金はない、具体的なメンバーはいないという状態で、とりあえず具体化するための委員会を作成、そこを中心に運営して行こうという事になった。

設立総会は 1992 年 10 月 30 日神田学士会館で行われた。多くの参加者を得て、真に盛大に行われた。感謝の極みであった。

センターにとって大事な事はいくつかあるが、的確な判断を行い、間違いのない答えを出す事は最も主要な事の一つであるが、センター側として各人がキチッと心にしまっておかねばならない事は、(1) 中立的判断と (2) 外部への情報の漏洩をしないという事である。センターでは中立委員を選定し、その長に東京大学の辻川先生になって戴き、先生を中心に社会からの数多くの腐食問題に対処して戴くことになった。委員の中には当然会社関係の方も多く成って戴いたが、最終判断は中立的に行うという事で、徐々に社会の信頼を得るに到っている。これと同時に佐藤教男会長時代に、外部からの協会への依頼はセンターを中心に考えると決めて戴いた事が大いに預かって力があつたと思う。感謝にたえない。我々と共にセンター設立の仲間として活動してきた松島さんがセンター設立の経緯について詳しく書かれているが、Phase II について触れられている。現在は設立当時考えていた Phase I の状態で、実際にハードを持ちマンチェスター大学や、ベルギーの腐食センターの様に活動するのを Phase II と考えている。

この Phase II に移行すべきかどうかは、念入りな議論と少なくとも運営委員会の一致した決断が必要である。

この決断の前に未だやるべき事が多々あると思う。その一つは協会外への宣伝活動である。これは人を得れば可能と思うが、多くの方々の意見を聞き、対処する考えである。